

---

# 別れ道

葉流香

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

別れ道

### 【Nコード】

N4204F

### 【作者名】

葉流香

### 【あらすじ】

かつて友達だった。そう言わざるをえない。人を信じることが出来ない、千香。友達を愛する、桜子。そして不由美、由梨。いやおうなしに離れ離れになっていってしまう少女たちの、儚い友情物語。

## 季節はずれの桜

——あの日々の道を歩いた

ここから違った道

過去を逆さに戻って

ぼんやりとヒカル街灯がただ、思い出にぼつりと点っていた。

——儚く散りゆく桜。

夕暮れの空気に、冷たい冬の匂いが混じる。

季節はずれの幻想は、アスファルトを一步一步、踏みしめる度に強く、眩暈のように目の前にちらついた。

——浅田桜子は、疲労を隠そうともせず、もともと猫背の背中をさらに丸めて、ふらふらしながら歩いていた。——人通りのない、平凡な田舎の細い道。

2

既にあたりは薄暗く、目の悪い彼女は、先十メートルも見渡せない。

——崩れて、ぺしゃんこになってしまいうるような危うさを抱えながら、唯一つ、街灯の灯る下、彼女は倒れるような勢いで座り込んだ。

——紺色のブレザーから、煙草と、鮮やかな蛍光黄色のライターを取り出し、…火をつけようとして、止めた。彼女は薄ら笑いを浮かべ、街灯の、冷えた柱にその背を預けた。 「…月が見える」  
誰にともなく桜子は呟く。

——戻ってきた。戻って…

——空虚な眼球の隅に、ぐるりと浮かんだ水たまり。

…嗚呼、疲れた。

——その頬を、涙が伝った。

「——パンツ見えるよ。」

急に、場違いな台詞が暗闇から聞こえた。

「……スパッツ、履いてるから。」

——なんて静かな空。

「泣いてんの。」

「……泣いてる。」

桜子は、ブレザーのポケットに手を入れるフリをして、ライターと煙草を仕舞った。

「この道、帰り道……」

桜子がぼつりと言った。

「……うん。」

——自転車ひきながら、よく歩いたよね、四人で。

街灯の明かりで照らされた、千香の表情がちらりと映った。

「あたし千香のそういうところ、嫌いだった。ううん。今の方が余計憎たらしい。」

膝に顔をうずめて、桜子は吐き捨てた。

——淡泊な千香。無関心な千香。

「…」

千香は冷たく無表情に黙り込んでいた。  
やがて言った。

「…こんなところ、来ないし。」

はっきりとした声だった。

千香は何拍も沈黙をおいて、続けた。

「…そりゃあ、心配ぐらい、するし。」

「あの時さ、誰がどうなるうと構わないって、いったじゃん。」  
間髪入れずに桜子が叫んだ。

…——正直、その言葉を聞いたときは、大人ぶって、そうだよ、  
などと言ったものの、心中はショックと絶望で、凍り付いていた。

そして——、離れ離れになってから、まるで過去など存在してい  
なかったかのような日々が続いていた。

——無音の映像が、繰り返し繰り返し。やがて色褪せて、ノイズ  
が混じり、ふつりと消えてゆく…。

「あんななんか、友達じゃない」

唐突にでた言葉が、トゲトゲしく響いた。

「…そう。」

千香は表情を崩さない。

「どうしてそんなに無関心なの？そうよ、あんななんか嫌いよ。」

「…ねえ、千香子、戻らないの？もう、二度と…」

儚く散りゆく桜。

季節はずれの幻想は、懐かしい帰り道の上にはらばらと降り注ぐ。

「不由美……」

千香子がぼそりと呟いた。

千香はやるせなさを遠い目に映して、一瞬だけ表情を歪ませた。

両膝に顔を埋めていた、桜子がびくりと揺れた。

ため息が漏れる。

——もう少しだったのよ。

もう少しで、私たち、大人になれた……

「私は……、そう、いじっぱりで頑固で負けず嫌い。

あんたみたいに淡泊で無関心なのが大人だと思ってた。」

黄色い街灯が、桜子の黒髪を、艶やかに浮き立たせていた。

「つまらないことで、揺れ動く私は、情けなくてガキだと思っていたのよ。だから、傷ついても、追いかけてくても、もっと一緒にいたいと思っても、無表情に唇を結んで黙っていたの。」

壊れたように桜子はまくしたてた。

沈黙ばかりが空気を包む。

——それきり桜子は黙ってしまった。

時々、掠れるような嗚咽が聞こえる。

千香はじっと、街灯の外の暗闇を見つめている。

——もしかして、と千香は思う。もしかして、自分のせいではな  
かろうか。全てが。

最初から、最後まで。

あの日、桜子と、由梨と、そして不由美に出会った時から。

——桜子は、何時も無理をしているように見えた。

無理して取り繕って、どうでもいいような振りをして。  
分かっていた。

桜子が、もっと一緒にいたいと思っている事。

私達を、限りなく大切に思っているということ。

なにせ、桜子は直ぐ顔や態度に出る。無理をしていると、それが余  
計、ありありと分かる。

それでも私は無視をした。

桜子のそんな気持ちですら、信じられなかったのだ。

——小学生の時、両親が離婚した。

毎日、喧嘩する両親を、互いに罵り、傷つけあう両親を見ていた。

——少ない小銭を握りしめ、姉さんに手を引かれて……

二人きりで、コンビニ弁当を食べていた日々。

いつのまにか出来上がっていた無表情。

いつの間にか、感じるものがなくなっていた心。

誰も信じまいと決めた。

この小さな山だらけの田舎町に越してきて、小さな中学校に転校

して、適当に友達をつくって安らかな日常が再び始まって…。  
それは、変わらなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4204f/>

---

別れ道

2011年11月13日23時14分発行